

Special Essay

アスリートの姿

救急医学講座 山下 典雄

数々の感動のドラマを残してソチ五輪が閉幕した。競技をゆっくり観戦する時間はなかったが、ニュースでそのドラマの一端を知ることができる。最近、涙腺が緩んできたようで、見てもいないのにニュースコラムなどを読んだだけで、目が潤んでくる自分を少し恥ずかしく思うときもある。歳をとると涙もろくなるというのは、それだけ人生経験を積んできたため、多くの場面で関係する人たちの思いを容易に想像することができるからだろうか。

浅田真央選手は、ショートプログラム（SP）で思いもよらない失敗をし、打ちひしがれたであろうに、フリー演技ではトリプルアクセルという最高難度の技を成功させ、自分の理想とする演技を完璧にこなして自己最高点を得た。SPの失敗でメダルには届かなかったが、何よりも世界中の人たちが涙する程の感動を与えたことは、金メダルよりも素晴らしいとさえ思う。これまで浅田選手は何度失敗しても3回転半ジャンプに挑み続けたという。世界のトップクラスであることは誰もが認め、今回は金メダルも期待されていた。現役最後のオリンピックで金メダルを得るには不安定な3回転半ジャンプはあきらめ、確実に高い得点を得る方法を選択する道もあったであろう。にもかかわらずSPで敢えて3回転半ジャンプに挑んだ。そして失敗しメダル獲得の希望は無くなったが、フリー演技で再度挑戦したのである。こういった経緯を知っている世界の多くのトップ選手達が浅田選手を称賛していた。最後まで、自分の理想とする演技を追及し、挑戦し続けた一途さ、純粹さ故にである。

スポーツが観戦者を感動させるのは、競技そのものの素晴らしさが理由として存在するのは勿論であるが、そこに至るまでの筆舌しがたい努力にも観戦者は思いをはせることができるからであると思う。話を広げれば、職人芸もそうである。匠の技がなした創造物は実用品であれ美辞術品であれ感動させられる。そこには、滾るような情熱、一途な思い、純粹な魂が込められているからである。そしてある意味、医療者も職人であり、医師として「匠の技」を修得するには、同様に熱く純粹な思いが必要となるろう。

翻って、私自身はどうなのか？と自問する。もっともっと情熱をもって仕事に当たら

なければ・・・と反省させられる。学生や若い臨床医に感動を伝えるには我々自身が情熱をもって仕事を実践し、学生に接しなければならないと思う。一方で、学生さんには感動する心を忘れないで学んでほしいと願う。

ひたむきなアスリート達の姿や彼らの織りなすドラマを伝え聞いて、スポーツは心に力を与えてくれるものだと思改めて感じる。彼らの武器が身体能力であるとするれば、我々の武器は知力であろう。その力をどう磨いていくかは、個人個人の情熱次第なのである。

